

# Support for **Woman** Doctors ～私からあなたへ～

## 「卒後から今の職場を選ぶまで」

伊藤 香葉先生【青森県 25 期】

お子さんは 中 2、小 5 の 2 人



小学生の頃から超安定思考だった私がまさか 40 歳にて転職するとは、夢にも思っていませんでした。研修医の頃に流行した酒井順子さんの「負け犬の遠吠え」という本を読み、まさしく自分のことと感じ、焦りもあって医師になって 3 年目の時に結婚、出産をしました。その後もう 1 人授かり、2 人の子どもを育てながら義務年限を果たしました。幸い私自身の実家が比較的近く、緊急時には援助を得ながら、義務年限の最後には一人診療所での所長として働くことができました。この診療所で義務年限の半分を過ごしました。診療所勤務は天職だと思っていました。地域全体を考え、医療、福祉、保健すべてに関わることが楽しくて仕方がなかったです。しかし、自分には急性期対応の知識と技術が不足していること、かかりつけ医の立場とは別の視点からこれまでの立ち位置を見ることで、より上手に地域医療を行えるのではないかと考えるようになったことから、救急を学ぶために義務年限後は救命救急センターを選びました。それくらいの軽い気持ちで救急に来たため、救急科専門医を取得し、ドクターヘリやドクターカーに乗って現場出動することは全くの想定外でした。しかし、救急医療に携わり地域の救急隊たちと一緒に仕事をしていくうちに、だんだんと救急が楽しいと思うようになり、地域全体の救急医療を良くするためにどうすれば良いかと考えるようになっていきました。

また、医師としてさらにステップアップしたいと思い、紆余曲折ながらも東北大学大学院の公衆衛生学専攻に進学しました。その頃離婚し子ども達の親権を元夫が持ったため、自由が利くようになったことも大きかったです。しかし、離婚の前後は精神的にも不安定で、すべてが辛く、すべてに自信を持ってない時期でもありました。せっかく進学し

た大学院も仕事との両立に悩み、ますます自信を失っていきました。そんなとき、厚生労働省の医療政策セミナーに参加してみたのが転機となりました。医系技官として働く友人達といろいろと話をするうちにやってみたいという思いが強くなりました。地域医療、救急医療を通して様々な立場や広い視点で物事を考える大切さを実感し、さらに別の視点で多くの人を助ける公衆衛生医師になりたいと思い始めたのです。ただ、その決断は容易ではなく、臨床現場から離れることを相当悩みました。しかし、厚生労働省に勤務していても専門医を継続できるよう臨床を続けられるしくみができたこと、一度きりの人生なのだから挑戦しなよと友人達が背中を押してくれたことが後押しとなりました。

生まれて初めての就職試験を受け、4 月から厚生労働省で働き始めました。覚悟はしていましたが今までと全く違う世界で、今の気分は研修医 1 年目です。初めての都会暮らしにも未だに慣れずにいます。幸い、今の部署はこれまで携わってきた災害医療や救急医療に関わる場所ですが、現場で患者さんを診療するのはまるで違います。「先生」と呼ばれることもなくなり、世間一般の社会人としての常識も求められます。大変な仕事ですが自分で選んだ道なので、とりあえずは前だけをみて進んでみようと思います。

皆には「なぜ、厚生労働省？」と驚かれますが、これまでの自分の経験してきたことを考えるとごく自然な流れだったと思います。どんな経験でも無駄なことはないですし、やりたいと思ったときに挑戦するときだと思います。行政職ではまだまだ新人ですが、せっかくの機会ですので、これまでの経験を活かし貪欲に学んで行きたいと思っています。

### 後輩医師・学生へ一言メッセージ

『すべての経験はどこかで必ず役立つ時が来る。

経験こそが人生の財産！』

「自治医大卒業生 女性医師支援 NEWS」では、読者の皆様からのご意見をお待ちいたしております。特集記事のテーマ、絵本やその他のコーナーについても、ご希望などあれば、是非お寄せください。  
連絡先：自治医科大学 地域医療推進課 卒後指導係  
E-mail : chisui@jichi.ac.jp